

氏名 柳光 剛志
授与した学位 博士
専攻分野の名称 医学
学位授与番号 博 甲第 7561 号
学位授与の日付 2026年3月25日
学位授与の要件 医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻
(学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目 Comparable Clinical Outcomes Between Segmentectomy and Lobectomy for NSCLC With Undiscovered N1/N2: A Multicenter Real-World Data Study
(予期せぬ N1/N2 リンパ節転移を伴う非小細胞肺癌に対する区域切除と葉切除の臨床成績比較：多施設リアルワールドデータ研究)

論文審査委員 教授 森松博史 教授 富樫庸介 教授 堀田勝幸

学位論文内容の要旨

【目的】小型末梢肺癌に対する区域切除は増加しているが、術中・術後に予期せぬリンパ節転移が判明した際に追加の残存葉切除が必要かどうか確立したエビデンスはない。本研究はその必要性を検証することを目的とした。【方法】2012～2021年に臨床的N0と診断され、術中または術後にN1/N2リンパ節転移が判明した非小細胞肺癌症例を対象とし、区域切除と葉切除の治療成績を比較した。背景未調整集団に加えて、傾向スコアを用いて背景因子を調整した集団において、予後および再発形式を評価した。【結果】葉切除736例、区域切除70例を解析した。未調整集団では区域切除群は高齢で肺機能が低く、腫瘍径が小さく、術後補助化学療法施行率も低かった。区域切除群では5年OSが有意に低かったが、RFSと累積再発率に差は認められなかった。調整後集団ではOS・RFS・累積再発率のいずれも群間差を認めなかった。区域切除群では局所再発がやや多い傾向がみられたが、リンパ節再発や遠隔転移に差はなかった。【結論】区域切除後にリンパ節転移が判明しても、追加の残存葉切除は必ずしも必要ではない可能性が示唆された。一方、区域切除群では局所再発の増加傾向がみられ、慎重な検討が求められる。

論文審査結果の要旨

小型末梢肺癌に対する区域切除は増加傾向にあるが、術中あるいは術後に予期せぬリンパ節転移が判明した際の追加切除の必要性については、未だ確立されたエビデンスが存在しない。

本研究は、2012年から2021年において、術前に臨床的リンパ節転移陰性と診断されながら、術中・術後に転移が判明した非小細胞肺癌症例を対象としたものである。区域切除群と肺葉切除群の治療成績を比較検討した結果、背景因子調整後の解析において、5年生存率、無再発生存率、累積再発率のいずれも両群間に有意差を認めず、区域切除が肺葉切除と同等の治療成績をもたらす可能性が示唆された。

審査委員からは、腫瘍学的（Oncological）指標や術後状態に関するデータの欠如について質疑がなされたが、本解析の限界と対象範囲について適切な回答がなされた。また、データ収集および解析手法についても詳細な説明が加えられ、妥当性が確認された。

本研究は、非小細胞肺癌の術中・術後に予期せぬリンパ節転移が発見された際の治療戦略決定において、極めて重要な知見を提供する価値ある業績である。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を授与される資格を有するものと認める。